

# 「法事の使」と「馬の落物」をめぐって

大嶋 善孝

はじめに

本稿では、愚か聾（息子）話のひとつである「法事の使」（大  
成番号三三三・A・B）と和尚と小僧譚のひとつである「馬の落  
物」（大成番号五三九）の関係を論じて、笑話研究の新しい立場  
を提示したい。

「法事の使」は『日本昔話大成』で、笑話のなかの愚人譚に分  
類され、さらに愚人譚のなかの愚か聾（息子）に分類されてい  
る<sup>1</sup>。管見の限りでは一九二六年に森口多里の『黄金の馬』に「馬  
鹿息子の話」として収録されたものと、同年に外山暦郎の『越  
後三条南郷談』に「グズバタの話」として収録されたものが、  
もともと古い報告例と思われる。以後、『日本昔話名彙』に「ぐ  
つの話（ぶつ問答・ぶつの話・ぐつ問答とも）」として一九例  
（出典のみ）があげられ、「ぐつは鍋の粥の煮える音で、さうい  
ふ名の愚か息子がいつ迄も其音に返事をしたといふ話。其前後

に寺の和尚を迎へに行く條、風呂を焚くとて法衣を焼く條、甘  
酒瓶の尻をおさへて居れといふ條など附加する。」と紹介されて  
いる<sup>3</sup>。これまでまとまった研究はなく、注目されることが少な  
かった話型と言える。

一方、「馬の落物」は『日本昔話大成』で、笑話のなかの巧智  
譚に分類され、さらに巧智譚のなかの和尚と小僧に分類されて  
いる<sup>4</sup>。一九二六年に佐々木喜善の『紫波郡昔話』に「剃刀（和  
尚と小僧譚其八）」として報告されているのが、管見の限りでは  
もともと古いものである<sup>5</sup>。この事例は「鮎は剃刀」（大成番号  
五二九A）と結びついているが、「鮎は剃刀」も『日本昔話大成』  
で、笑話のなかの巧智譚に分類され、さらに巧智譚のなかの和  
尚と小僧に分類されている<sup>6</sup>。後述するように「馬の落物」と「鮎  
は剃刀」は結び付いて語られる場合が多い。『日本昔話名彙』で  
は、「和尚と小僧」という項目が立てられる。「此話は細かく分  
類することは出来るが大よそ意味無く、又数にも限りがある。  
神童譚よりの分化とみとめられ、最初はこの類の夙慧譚の生長

したものであらうが、大方今は笑話化して「和尚小僧」の名で通り、和尚を笑ふ方へのびてゐる。別に小僧も愚かであった話は「愚か村」と共通である。」とされ、イールの十一の話型が区別されている。「鮎は剃刀」と「馬の落物」は「イ馬から落ちたものは皆拾ふ」と呼ばれ、七例（出典のみ）があげられている。また、「和尚と小僧」は「笑話」ではなく「完形昔話」の中の「知慧のはたらき」に含まれており、独特の位置づけを与えられている。

「鮎は剃刀」と「馬の落物」には、石塚一雄によるまとまった研究がある。石塚は室町時代の皇族で『看聞日記』の作者でもある後崇光院が筆録した説話断簡について、「鮎は剃刀」と「馬の落物」に一致する点が多いことを指摘し、院が筆録した説話の復元を試みており、その一環として「鮎は剃刀」と「馬の落物」の口承の事例を集成している。<sup>(8)</sup>

また、和尚と小僧譚に関する最近の研究として、玉水洋匡が「餅は本尊様」（大成番号五三三）を扱っている。小僧がこっそり食べて本尊の口になすり付けた食物に注目し、それぞれの地域の食文化との関わりを指摘している。<sup>(9)</sup>二〇一二年には、琴榮辰の『東アジア笑話比較研究』が上梓された。琴は、日本の小僧と和尚譚と朝鮮の資料の詳細な比較を試みている。たとえば、「飴は毒」（大成番号五三二）について、『沙石集』との関連や朝鮮にも類話があることがすでに報告されているが、琴は『村談解頤』（一四八三年以前成立の朝鮮の笑話集）と中国の『金瓶梅詞話』

などの比較から、「以前『沙石集』に影響を与えた中国の「和尚と小僧譚」に変化が生じ、このバージョンアップした新たな「和尚と小僧譚」の影響が中国では『金瓶梅詞話』に、朝鮮では『村談解頤』に、さらに日本では『一休諸国物語』などにそれぞれ現れたことを意味するであろう。」<sup>(10)</sup>と中国から日本・朝鮮への影響が二度にわたることを述べている。影響関係とそれが生じた時期について具体的に論じている点に意義があるといえる。

## 一 「法事の使」

「法事の使」は、次のような要素で構成されている。

要素1 グツと呼ばれる愚かな息子がいる。グツは毘に掛かった鳥や獣を放してしまう。父親や母親や兄から毘にかかったのは何でも叩けと言われ、毘に掛かった母親や父親を殺してしまう。

要素2 グツは法事（葬儀）のために寺に和尚を迎えに行くように命じられるが、和尚は黒い着物を着ているなどと教えられ、鳥や牛を和尚と思つて話しかける。鳥がカーカーと鳴くので、母親の法事（葬儀）ではありませんなどと話しかける事例もある。なお、鹿児島県では、和尚ではなく、医者を迎えに行くと言られる例もある。

要素3 グツは飯を炊くように父親や母親や兄から命じられる。飯の炊けるグツグツという音がする。自分を呼んでいると勘違

いし、何度も返事をするが音がするので、自分を馬鹿にしていると  
思っていて飯に灰を入れる。あるいはクツクツクツという音が  
するので、食っていないと怒る事例もある。

要素4 和尚をもてなすために甘酒の瓶を二階や天井裏から下  
ろす。グツは甘酒の瓶の尻を持ってと言われ、瓶ではなく自分の  
尻を持つ。瓶が落ちて割れる。

要素5 和尚を風呂に入れるが、風呂がぬるい。グツはそのあ  
たりの物は何でも燃やせと言われ、和尚の衣や着物を燃やす。  
和尚は芋の葉で前を隠して帰るといふ事例も多い。

『日本昔話大成』の「昔話の型」では、要素1〜5で構成され  
るものを三三三Aとし、要素1を欠いたものを三三三Bとして  
いる。<sup>(1)</sup>要素の構成について述べると、ほとんどの事例では要素  
の並ぶ順序は1から5への順序である。しかし、要素1〜5の  
うちのいくつかが欠けることがあり、そのために類話間のバリ  
エーションが多いという印象を受ける。なお、『日本昔話通観』  
では、要素1〜5がそろったものを「八七〇番 法事の使い」、  
要素3を「八六八番 くず」、要素4を「八六七番 瓶の尻」、  
要素5を「八六九番 衣を焼く」としている。<sup>(2)</sup>  
この昔話は愚人譚であり、グツという愚者が愚行を繰り返  
す話である。しかし、愚行といつても、個々の愚行の内容を詳  
しく見ると、少しずつ違いがあることに気づくだろう。

要素1では、まずグツは獲物になる山鳥や猪がどういふもの  
か知らない。さらにグツは親や兄の指示を字義通りに実行した

ために母親や父親を死なせる。

要素2では、まずグツは和尚とはどういふものか知らない。  
さらに黒い着物を着て高い所にいるという説明を誤解して鳥を  
和尚と間違える。

要素3では、飯が炊けるグツグツという音を自分の名前と誤  
解する。

要素4は、聞き違いが誤解の原因になっている点は要素3と  
共通するが、そこには瓶の尻と人間の尻という形態上の共通性  
も関わっている。

要素5では、グツは風呂焚きに関する指示を字義通りに実行  
したために、入浴中の和尚の衣を燃やしてしまう。

ここでは、指示を字義通りに実行するという点に注目して、  
要素1と要素5についてより詳しく見ていきたい。

まず、要素1で、グツが母親や父親からどのような指示をさ  
れるかを見たい。以下の事例では、語り手の居住地、氏名、生  
年（または調査時の年齢）の順にあげ、居住地の市町村名が変  
更になっている場合はかっこ内に現在の市町村名を記す。語り  
手が不明な場合は採話地だけを、語り手の生年（または調査時  
の年齢）が不明な場合は居住地と氏名だけを記す。

事例1の1 宮城県登米郡追町（現登米市）新田 伊藤ひさみ  
一八九八年（明治三二）

要素1〜3で構成されるが、母親に畑から牛蒡を抜いて皮を  
むけと言われ、ごんぼ馬っこ（尾の短い馬）を殺して皮を剥く

という要素が要素2と3の間に挿入されている。罨を見に行つたブツは鹿と雉を逃がしてしまふと、母親から「何でも引つ掛がつていたら獲つてこ」と言われ、隣の婆様が罨にかつたのをたたき殺してしまふ。<sup>13)</sup>

**事例1の2** 鳥取県東伯郡赤碕町（現琴浦町）大父 川上貞蔵  
一八八六年（明治一九）

要素1～4で構成されるが、罨を見に行つた弟は兎を逃がす。兄は「かかつたもんなら、なんでも取つて来にゃいけんわい」と弟に言う。父親が罨にかかると、弟は棒でたたき殺してしまふ。<sup>14)</sup>

**事例1の3** 広島県山県郡加計町（現安芸太田町）杉ノ泊 河野オクヨ  
一九一五年（大正四）

要素1・2・5で構成されるが、兄が愚か。兄が罨を見に行き、山鳥を逃がす。弟は「今日は何でもいいからかかつたものは何でも引つぱつて帰れ」と言う。罨に母親がかかつているが、兄は殺して引つぱつて帰る。<sup>15)</sup>

**事例1の4** 長崎県五島列島有川町（現南松浦郡新上五島町）

要素1・2・3・5で構成されるが、グツは罨を見に行き、雉と猪を逃がす。兄は「これからは何でもかかつているものは逃がさずにごろごろそびいて来い」と言う。母親が罨にかかるのと、グツは家までそびいて来たので母親は死んでしまふ。<sup>16)</sup>

グツが「何でも獲つて来い」とか「何でも引つぱつて来い」と指示され、その指示を字義通りに実行して、隣の婆様や父親や母親が罨にかかつて、たたいたり引つぱつて来たりしてし

まうのである。

次に要素5でグツがどのような指示をされるかを見たい。

**事例1の5** 新潟県古志郡山古志村（現長岡市）字虫亀 長島ツル  
一八六八年（明治元元）

要素2～5で構成される。ズブは風呂焚きを命じられるが、「火をたけと言つても、たきもんがないど」と言う。すると、「そこらにあるもんを、何でも、たけや。」と言われ、ズブは和尚の脱いだ着物や衣を燃やしてしまふ。<sup>17)</sup>

**事例1の6** 富山県射水郡小杉町（現射水市）黒河 伊藤京枝  
一八六三年（文久3）

要素2・3・5で構成されるが（ただし3・2・5の順）、グズとダブの兄弟、二人とも愚か。要素2・5の主人公はダブ。要素3の主人公はグズ。ダブが醤油を買いに行き、醤油のダブという音を自分の名を呼んでいると思ひ、醤油を捨てるといふ要素がある。ダブは風呂焚きを命じられ、「そこねあるもん、何でもええけで、少し焚いてくれつしやいまん」と言われ、和尚の衣を燃やしてしまふ。<sup>18)</sup>

**事例1の7** 徳島県美馬郡

要素2～5で構成されるが、ブツは風呂焚きを命じられ、「そこらへんのものなんでもたいとけ」と言われ、和尚の衣もみんな燃やしてしまふ。<sup>19)</sup>

**事例1の8** 熊本県阿蘇郡阿蘇町（現阿蘇市）役犬原 城戸親間  
一九〇九年（明治四二）

要素2・4・5で構成されるが、馬鹿息子は風呂焚きを命じられ、「何をくべようかい」と言うと、「そこらにあるもんを何でもええけ、くべえ」と言われ、和尚の衣や禪を燃やしてしまう。<sup>(20)</sup>

要素5では「そこらにあるものは何でも燃やせ」と指示され、和尚が脱いだ衣を燃やしてしまうわけである。要素1と要素5では、主人公は指示を字義通りに実行しているが、その指示は「何でも○○しろ。」という形で表現されていることが確認できる。

## 二 「馬の落物」と「鮎は剃刀」

「馬の落物」と「鮎は剃刀」は結びついて語られることが多く、次のような要素で構成されている。

要素A 和尚が鮎を食べているところを小僧が見つけると、和尚は剃刀だと言う。

要素B 小僧が供をして、和尚が馬に乗って出掛ける。川を渡るときに鮎が泳いでいるので、小僧は剃刀が泳いでいると言う。

要素C 和尚は小僧に見たものは見捨てに、聞いたものは聞き捨てにしると言う。和尚の帽子が落ちるが、小僧は何も言わない。

要素D 和尚は小僧に落ちたものは何でも拾えと言う。馬が糞をすると、小僧は糞を拾って帽子に入れる。

『日本昔話大成』の「昔話の型」では、要素A・Bで構成されるものを「鮎は剃刀」（大成番号五二九A）、要素C・Dで構成されるものを「馬の落物」（大成番号五三九）としている。<sup>(21)</sup>

本昔話通観』では、要素A・Bを「六〇五番 和尚と小僧―あゆはかみそり」、要素C・Dを「六〇六番 和尚と小僧―馬の落とし物」としている。<sup>(22)</sup>

本稿では、要素Dに注目したい。

事例2の1 山形県西置賜郡小国町大石沢 高橋しのぶ 一九七〇年当時六九歳

要素B・C・Dで構成されるが、小僧は川に雑魚がいると言う。和尚の笠が飛ぶが小僧は教えない。小僧は「落ちるもの何でも拾え」と言われ、馬糞を笠で受ける。<sup>(23)</sup>

事例2の2 石川県能美郡尾口村（現白山市） 深瀬

要素C・Dで構成されるが、小僧は見捨て・聞き捨てではなく、下を見ないで歩くと命じられる。和尚の帽子が飛ばされるが、小僧は何もしない。小僧は「馬から落ちるものは、何でも取れ」と言われ、帽子で馬糞を受ける。<sup>(24)</sup>

事例2の3 広島県神石郡神石町（現神石高原町） 永野 横山馨

事例A・B・C・Dで構成される。和尚の帽子が落ちるが、小僧は何もしない。小僧は「馬から落ちたものは何んでも拾え」と言われ、馬糞を帽子にいっぱい入れる。<sup>(25)</sup>

事例2の4 大分県北海部郡臼杵町（現臼杵市） 後藤寅生

要素B・C・Dで構成されるが、小僧は「馬の上から落つるもんは、なんでん拾うちよけ」と言われ、笠で馬糞を受ける。<sup>(26)</sup>

小僧は「馬から落ちたものは何でも拾え」と指示され、馬から落ちた糞を拾って笠や帽子の中に入れたり、笠や帽子で馬の

糞を受けるが、このような指示は、先述の「法事の使」の要素1における「何でも獲つて来い」とか「何でも引っぱって来い」という指示や、要素5における「そこらにあるものは何でも燃やせ」という指示と類似しており、いずれの指示も「何でも〇〇しろ」という形でまとめることができるものである。そして、主人公はその指示を字義通りに実行するのである。

「法事の使」は愚人譚に分類され、「馬の落物」は巧智譚に分類されるが、主人公の行為に注目した場合、実は両者が近い位置にあることが理解されるだろう。

ただし、行為の背後にある心理まで掘り下げて分析するならば、要素Dにおける小僧の行為は指示を字義通りに実行するのではなく、指示を字義通りに実行するふりをした賢い行為と見なすことができる。指示を字義通りに実行するという行為が、「法事の使」の要素1・5では愚かさの表れとなり、「馬の落物」の要素Dでは賢さの表れとなるわけである。

では、外形上は同一の行為が愚かな行為になる場合もあれば、賢い行為になる場合もあるとするならば、聞き手は二つの行為の背後にある心理の相違をどのように区別するのだろうか。「法事の使」の事例を見ていくと、冒頭で、主人公であるグツについて馬鹿な子であるとか、少し足りない子であると語っている事例が多いことに気づく。以下の事例を見よう。

**事例2の5** 新潟県両津市（現佐渡市）馬首 斎藤チエ  
一九〇九年（明治四二）

要素5だけで構成されるが、「お父さんとはかな息子がいました。」と始まる。<sup>27)</sup>

**事例2の6** 京都府竹野郡弥栄町（現京丹後市）小田 堀江ムメ  
一九〇三年（明治三六）

要素2・3・5で構成されるが、「三人の兄弟連れおって、ぶすいう子が阿呆みたいな子で」と始まる。<sup>28)</sup>

**事例2の7** 岡山県上房郡北房町（現真庭市）皆部 大森かつ子  
一九二〇年（大正九）

要素1〜5で構成されるが（ただし順は1・3・4・2・5）、「むかしむかし、ぐずいう、ちいとあほうな子がおったそいうな。」と始まる。<sup>29)</sup>

**事例2の8** 愛媛県八幡浜市日土町今出 井上ツルノ  
一九〇〇年（明治三三）

要素1〜5で構成されるが、「むかしむかし、あるところに「ぶつ」と「とく」という二人の兄弟があらましてな、ほして、ぶつはほんに頭のわるい、ほんで、とくは兄のほうで、少しはええんですらい（頭がいいのです）」と始まる。<sup>30)</sup>

また、主人公のグズやグツやアスという名前は、要素3で飯が煮えたときの音と類似していることに意味があるわけであるが、名前自体に愚か者という含意があると考えられないだろうか。たとえば、次の事例を見たい。

**事例2の9** 山形県西置賜郡小国町小玉川 佐藤とよい  
一九〇二年（明治三五）

要素2〜4で構成される。「とんとむがしあつけどやれ。ある村に、親たちに早く死なれて、兄（あに）やとぐずな弟（おじ）と二人口で暮らす家あつたけどやれ。」で始まるが、「ぐず」のるまな・まぬけな」という注がある。要素2では弟が和尚と牛を間違えると、兄は「ぐずだなあ。」と言う。要素3では飯が炊けて「ぐずつ　ぐずつ　ぐずつ　ぐずつ」という音がすると、弟は自分のことを呼んだと思い、弟は怒って飯を捨てる。すると、兄は弟に「そつだから、ぐずだつて言われるあんだわ。」と言<sup>31</sup>う。

事例2の9では、「ぐず」は、弟の名前かどうかあまり明確ではないが、愚かという意味で使われていることは明らかである。

「法事の使」では、主人公が愚か者であることを聞き手に伝える必要がある、そのために冒頭で主人公の能力について言及していると推測することができる。また、主人公の名前が愚かさを連想させる場合も、同様の効果を与えていると考えられるだろう。一方、「馬の落物」に限らず和尚と小僧譚では、聞き手は冒頭で登場人物が和尚と小僧だということを知ることによって、その話が賢い小僧が和尚をやり込める話であると了解する場合が多いと推測される。

「法事の使」の場合、聞き手は主人公が愚かであることを了解している、グツの行為を指示を字義通りに実行する愚かな行為として受け取るのに対して、「馬の落物」の場合、聞き手は小僧が賢いことを了解しているので、小僧の行為を指示を字義

通りに実行するふりをした賢い行為として受け取ると考えられる。そのために、行為の外見上の一致にもかかわらず、その背後の心理を混同することがないと考えられるのである。

### 三 「法事の使」と和尚と小僧譚

前節では、愚人譚である「法事の使」と巧智譚である「馬の落物」が、近い関係にあることを論じたが、これに対して、こうした議論は形式的なもので、無意味であるという反論があるかもしれない。そこで、本節では、「法事の使」の要素5をもう一度とりあげて、別の角度から愚人譚と巧智譚の連続性を示したい。

前節では、要素5について「和尚を風呂に入れるが、風呂がぬるい。グツはそのあたりの物は何でも燃やせと言われ、和尚の衣や着物を燃やす。和尚は芋の葉で前を隠して帰るといふ事例も多い。」とまとめた。グツは、そのあたりのものを何でも燃やせと言われて和尚の衣や着物を燃やすのだが、誰がそのような指示をしたのかという点に注目したい。すると、はっきりとした事例と、和尚が指示をした事例があることに気づくのである。

まず、兄や母親や父親がグツに指示した事例をあげよう。

事例3の1 新潟県五泉市東郷屋川 白井トミ 一九六二〜六七年当時七七歳

要素2〜5で構成される。母親とグスという息子。グスは風呂

焚きを命じられ、焚き物がないと言うと、母親が「そんなこと、  
いうていので、そこらにあるがん、みんな、たけや。」と言う。  
グスは和尚の衣や着物をみな焚いてしまい、和尚は裸で帰る。<sup>(32)</sup>

**事例3の2** 岐阜県郡上郡大和村（現郡上市）上剣 小池新五  
郎 一八九六年（明治二九）

要素2・4・5で構成される。父親とグズ。和尚がもう少し  
焚いてくれと言い、グズが「何を焚いたらよからう」と言う  
と、父親が「何でもいいから、そこらのものをくべよ」と言う。グ  
ズは衣を焚いてしまい、和尚は朴の葉で前を隠して帰る。<sup>(33)</sup>

**事例3の3** 岡山県真庭郡八束村（現真庭市）花園 小谷伊勢  
与 一八九三年（明治二六）

要素2・3・5で構成される。兄と弟のグツ。衣がないので、  
和尚がグツに訊ねると、「ああ、兄貴が、『そこらの物をなんで  
も持つてつて焚いたげえ』言うたてえ、焚いてしもうた」と答  
える。グツは家を出され、「一つ覚え・物売型」（大成番号  
三三〇A）に続く。グツは火事場で尻をあぶり、水をかけるよ  
うに言われる。夫婦喧嘩に水をかけて、仲裁するものと言わ  
れる。牛の喧嘩の仲裁をして殺される。<sup>(34)</sup>

**事例3の4** 香川県香川郡香川町（現高松市）浅野道端、赤松  
亀太郎、一八九七年（明治三〇）

要素2〜5で構成される。母親とグツツ。和尚を風呂に入れ  
るが、焚く物がない。母親に訊ねると、母親が「焚く物がなけ  
れば、そこらにある物なんでも焚いとけ」と言うので、グツツ

は和尚の衣を燃やす。和尚は芋の葉で前を隠して帰る。<sup>(35)</sup>

今度は、和尚がグツに指示した事例をあげよう。

**事例3の5** 新潟県南蒲原郡下田村（現三条市）楢山 柳取洋  
子 一九四一年（昭和二六）

要素2〜5で構成される。父親とグシ。坊さんが「ちいとぬ  
るいすけ、そこらへんにあるもん、ぜんぶくべてくれ。」と言  
うので、着物も褌も燃やしてしまう。坊さんは落の葉で前を隠し  
て帰る。<sup>(36)</sup>

**事例3の6** 岐阜県恵那郡加子母村（現中津川市）田口喜美枝  
一九〇二年（明治三五）

要素2・3・5で構成される。兄とグツ。グツが焚くものが  
ないと言うと、和尚が「そこらにあるもの、何でもくべてたけ」  
と言うので、衣も燃やす。和尚は桐の葉で前を隠して帰る。<sup>(37)</sup>

**事例3の7** 広島県甲奴郡上下町（現府中市）有福 居神治郎  
一九〇八年（明治四一）

要素2・3・5で構成される。母親とブツ。和尚が「こりゃ  
いけなあ。そこへあるものを、なんねえかなあと、くべえの。  
そうせにゃあ寒くていけなあ」と言うので、衣を燃やす。落の  
葉で隠して帰る。<sup>(38)</sup>

**事例3の8** 大分県東国東郡武蔵町（現国東市）内田 宮崎シ  
オ 一九五八年当時六九歳

要素1〜5で構成される。父親とブス。坊さんを風呂に入れ  
る。坊さんが「もうひとくべ焚いちくりい。温（ぬる）いき」

と言ひ、ブスが「今焚く物がねえ」と答えると、「何でんそこにある物をくびい」と言うので、坊さんの衣も燃やしてしまふ。坊さんは里芋の葉で前を隠して帰る。<sup>(39)</sup>

グツの行為は外形上は同一であるが、事例3の1〜4では、グツは兄や母親や父親からの「そこらにあるものは何でも燃やせ」という指示を受けて和尚の衣を燃やしてしまふ。一方、事例3の5〜8では、和尚からの同様の指示を受けて和尚の衣を燃やしてしまふ。和尚の指示がきっかけになっているという点で事例3の5〜8が、和尚と小僧譚に一步近づいていることが理解されるだろう。

さらに、登場人物がグツではなく、小僧になっている事例も、いくつも見られる。

**事例3の9** 鳥取県東伯郡関金町（現倉吉市）郡家 池田清蔵  
一八七九年（明治十二）

要素5で構成される。和尚が法事に行くが、留守中に風呂を沸かすように小僧に言い付ける。和尚が帰つて来ると、小僧は木がないのでまだ沸いてないと答える。和尚は「まあ、そこらにある物をくべとけえ」と言う。小僧は、法事から戻つて脱いであった衣を燃やしてしまふ。小僧は和尚から、「や、このだらずめが」とひどく叱られる。<sup>(40)</sup>

**事例3の10** 岡山県

要素5で構成される。ある寺にグズという小僧がいる。和尚が風呂を炊くように言う。和尚が風呂に入つてから、ぬるいの

で風呂を焚けと言う。小僧が焚物がないと答えると、和尚は「ないことはない。何かあろう。あるもんは何でもかまわん、くべしまえ。」と言う。小僧は、和尚の衣も袈裟も燃やしてしまふ。和尚は着るものがないので、路の葉で前を隠す。<sup>(41)</sup>

**事例3の11** 広島県神石郡豊松村（現神石高原町）赤木勇夫  
一九二二年（大正一一）

要素5で構成される。和尚と小僧が檀家に法要に行き、和尚は檀家の風呂に入る。和尚が小僧に風呂を焚くように言うと、小僧はくべる物がないと言う。和尚は、「無あこたあ無かろうが。そこらの物を探あてみい。何ぞくべる物があるうけえ。何でも良（え）えけえ、そこらにある物を拾うてくべえ」と言う。小僧は衣を焼く。和尚は路の葉で前を隠して帰る。<sup>(42)</sup>

**事例3の12** 山口県周防大島（現大島郡周防大島町）

要素5で構成される。和尚が小僧を連れて法事に行く。そこで風呂をすすめられて入る。湯がぬるいので小僧に火を焚かせるが、小僧は薪がなくなつたと言う。和尚は「そこらにあるものを何でも焚け」と言う。小僧は衣を焚いてしまふ。和尚は裸で寺に帰る。<sup>(43)</sup>

**事例3の13** 徳島県三好郡東祖谷山村（現三好市）菅生 宮内  
文夫 一九二五年（大正一四）

要素5で構成される。和尚と小僧が法事に行く。和尚が風呂に入ると、ぬるいので小僧を呼び、焚くように命じる。焚くものが見当たらないので、小僧がくずくずしていると、和尚は「何

でも早よ燃やせ」と言う。小僧は衣も禪も燃やす。和尚は、ごほうの葉で隠して帰る。<sup>44)</sup>

事例3の14 大分県東国東郡国見町（現国東市）赤根 末綱サ  
ク 一九五八年当時八四歳

要素5で構成される。和尚と小僧。和尚が小僧に風呂を焚くように言う。小僧が焚き物がないと言うと、「そきある物を何でもくびい」と言ったので、衣も何もかも燃やす。和尚は裸で帰る。<sup>45)</sup>

事例3の9〜14では登場するのは和尚と小僧だけであり、形式的には和尚と小僧譚といえる。事例3の9・12・13・14については、小僧が愚かなのか、それとも賢いのか、言いかえれば、小僧が指示を字義通りに実行したのか、それとも指示を字義通りに実行するふりをしたのかは読み取ることが出来ない。ただ、前節で論じたように、登場人物が小僧と和尚なのだから、小僧は賢く、指示を字義通りに実行するふりをして和尚を困らせたのだと、聞き手が判断した可能性は高いのでなからうか。

一方、事例3の10では、小僧の名前はグズであり、前節で触れたように、名前が愚かさを連想させる点から、小僧は愚かで指示を字義通りに実行して衣を燃やしたと推測できる可能性があるだろう。それに対して、事例3の11では、冒頭に「むかし。和尚と小僧がおつたげない。なかなか小僧は、手に合わん（手に余る）小僧で、和尚の言うことを聞かん。」とあって、小僧がいたずら者であることが示唆されており、和尚を困らせるために賢い小僧が指示を字義通りに実行するふりをしたと読み取ることが許される

だろう。いずれにしろ、事例3の9〜14は、事例3の5〜8よりさらに和尚と小僧譚に近づいたものといえるだろう。

また、要素5の最後で、着るものを燃やされてしまった和尚が落や芋の葉で前を隠して、あるいは裸で寺に帰ったと語られる事例が多い。和尚と小僧譚には、小僧の機智とともに、和尚の失敗の滑稽さを強調する傾向があることを勘案すると、和尚が落や芋の葉で前を隠したり裸で寺に帰ることも、「法事の使」が和尚と小僧譚に近いことの証左と考えられるのではなからうか。

## 結論

愚人譚に見られるさまざまな愚行は、愚行として一括され、個々の愚行の内容やその背後の心理まで深く考察されることはなかったと思われる。本稿では、「何でも〇〇しろ」という指示を字義通りに実行するという、主人公の行動様式に着目して、「法事の使」の要素1・5と、「馬の落物」の要素Dを分析し、愚人譚に分類される「法事の使」と巧智譚に分類される「馬の落物」が近い関係にあることを明らかにした。

また、「法事の使」の要素5については、(1)グツの兄や父親や母親が指示を出した場合、(2)和尚が指示を出した場合、さらに(3)登場人物が和尚と小僧である場合に分けられることを示し、(1)・(2)・(3)の順に和尚と小僧譚に近づくことを示した。すなわち、「そこらにあるものは何でも燃やせ」という指

示にしたがつて衣を燃やすという要素は、愚人譚を構成すること  
もあれば、和尚と小僧譚のような巧智譚を構成することもあるの  
である。これも、愚人譚と巧智譚という区分が、必ずしも自明な  
ものではなく、連続的で流動的であることの証左であろう。

集積された膨大なデータをいかに整理するかは、現在の昔話  
研究者を悩ませる大きな課題である。そして、データを整理す  
るために、細かく分類するという方向が強調され、話型やモチー  
フが設定されて来た。しかし、そうした方向は必ずしも十分な  
成果を生んでいるとは思えない。愚人譚と巧智譚という分類を  
横断して分析するという本稿の立場は、こうした現状を打開す  
る一つの方法になるのではなからうか。

注

- (1) 関敬吾『日本昔話大成 第八巻 笑話二』一九七九 角川書店  
(2) 森口多里『黄金の馬』一九二六 実業之日本社 本稿では国  
立国会図書館国際子ども図書館のネット公開されているもの  
に依った。外山暦郎『越後三条南郷談』一九二六 郷土研究  
社。なお、稿本だが、明治末年に福岡県教育会がまとめた  
『福岡県童話』には三例が収録されている。本稿では福岡県  
教育会『福岡昔話集』一九七五 岩崎美術社に依った。  
(3) 日本放送協会『日本昔話名彙』一九四八 日本放送出版協会  
二二九頁  
(4) 関敬吾『日本昔話大成 第九巻 笑話二』一九七九 角川書店

- (5) 佐々木喜善『紫波郡昔話』一九二六 郷土研究社  
(6) (注4) に同じ  
(7) (注3) に同じ 一七九頁  
(8) 石塚一雄『和尚と小僧』の説話断簡について 国学院大学  
文学第二研究室『口承文芸の展開 上巻』一九七四 桜楓社  
(9) 玉水洋匡『和尚と小僧譚研究―餅は本尊様―考―』『昔話  
―研究と資料―』三八号 二〇一〇  
(10) 琴榮辰『東アジア笑話比較研究』二〇二二 勉誠出版 五九頁  
(11) 『昔話の型』関敬吾・野村純一・大島廣志『日本昔話大成  
第十一巻』一九八〇 角川書店  
(12) 稲田浩二『日本昔話通観 第二八巻 昔話タイプ・インデッ  
クス』一九八八 同朋舎  
(13) 佐々木徳夫『陸前の昔話』一九七九、三弥井書店、四五―  
四五五頁  
(14) 稲田浩二・福田晃『大山北麓の昔話』一九七四 三弥井書店  
六四四―六四七頁  
(15) 国学院大学説話研究会『芸北地方昔話集』一九七七 自刊  
一八七―一八八頁  
(16) 久保清・橋浦泰雄『五島民俗図誌』一九三四 一誠社  
二五五―二五七頁  
(17) 水沢謙一『とんと昔があつたけど 第一集』一九七五 未来  
社 二三八―二四三頁  
(18) 伊藤曙覧『越中射水の昔話』一九七一 三弥井書店 一七六  
―一八二頁

- (19) 武田明『美馬郡昔話』『昔話研究』第二巻第一号 一九三六  
 (20) 浜名志松・三原幸久・三宅忠明『肥後の昔話』一九七七年  
 日本放送出版協会 九八～一〇〇頁  
 (21) 注(11)に同じ  
 (22) 注(12)に同じ  
 (23) 武田正『木小屋話』一九七一 桜楓社 一六三～一六五頁  
 (24) 山下久男『加賀昔話集』一九七五 岩崎美術社 一七六頁  
 (25) 村岡浅夫『芸備昔話集』一九七五 岩崎美術社 二二三～  
 二二三頁  
 (26) 阿部通良・後藤貞夫・鈴木清美『大分昔話集』一九七五 岩  
 崎美術社 一七八～一八〇頁  
 (27) 大谷女子大学説話文学研究会『両津市昔話集 下』一九七九  
 自刊 三七七～三七八頁  
 (28) 大谷女子大学説話文学研究会『弥栄町昔話集』一九七二 自  
 刊 一五八～一六〇頁  
 (29) 岡山民話の会『なんと昔があつたげな 下』一九六四 自刊  
 一三〇～一三三頁  
 (30) 和田良誉『伊予の昔話』一九七三 日本放送出版協会  
 一三一～一三八頁  
 (31) 小野和子『長者原老嫗夜話』一九九二 評論社 五四～六〇頁  
 (32) 新潟県立村松高校社会クラブ『五泉の民話』一九六八 中村  
 書店 一四九～一五四頁  
 (33) 稲田浩二『美濃の昔話』一九七七 日本放送出版協会  
 二二一～二二四頁  
 (34) 稲田浩二・福田晃『蒜山盆地の昔話』一九六八 三弥井書店  
 四四二～四四四頁  
 (35) 谷原博信『高松地方昔話集 母から子への民話』一九七六  
 ふるさと研究会 一四～一八頁  
 (36) 下田村立笹岡小学校『越後下田の昔話』二〇〇〇 同刊行会  
 五〇四～五〇八頁  
 (37) 田口喜美枝『かしものむかしばなし』一九七八 恵那児童文  
 学の会 四九～五四頁  
 (38) 広島女子大学国語国文学研究室『広島県上下町昔話集』  
 一九八三 溪水社 一六六～一七一頁  
 (39) 宮崎一枝『国東半島の昔話』一九六九 三弥井書店 三〇四  
 ～三〇八頁  
 (40) 山陽学園短期大学昔話同好会『鳥取県関金町の昔話』  
 一九七二 自刊 一三四頁  
 (41) 今村勝臣『岡山県御津郡昔話集』一九七四 三省堂 一四四  
 頁 初版は一九四三  
 (42) 中国放送『ひろしまの民話 第二集』一九八二 第一法規出  
 版 一四六～一四七頁  
 (43) 宮本常一『周防大島昔話集』一九五六 大島文化研究連盟  
 一〇五～一〇六頁  
 (44) 細川頼重『東祖谷昔話集』一九七五 岩崎美術社 二五二～  
 二五三頁  
 (45) 注(39)に同じ 三四〇頁  
 (おおしま・よしたか／日本口承文芸学会会員)